

---

# 月夜

芭苑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜

【Zコード】

Z0972D

【作者名】

芭苑

【あらすじ】

人間と吸血鬼の住む世吸血鬼は人間の血を求める、人間は吸血鬼を恐れる。吸血鬼が支配下にある北の地に人間達の小さな光が闇に向かう。

## N O . 1 : 北の地

朝は光

夜は闇

闇は光を喰い、光は闇に怯える

その狭間は・・・

人と吸血鬼ヴァンパイアが住む世。吸血鬼は人の血を求め、人は吸血鬼を恐れ怯える。

人の王が住む地より北の地方は既に吸血鬼の支配下にあつた。北の地に住む人々は毎夜、吸血鬼によつて消えてゆく。

誰もが恐れる地に一人の青年が足を踏み入れようとしている。

青年は銀色の長髪をしていて、後ろに髪を束ね、サファイアのような青色の瞳をしていて、腰には剣があつた。北の地であるため雪が積もつており吐く息は白かつた。

「ここか・・・」

青年が再び足を動かそうとしたとき

「銀髪のアンタ、その先には行かない方がいいわよ」

女の声がした。声がした方を見ると長い茶髪を一つゆりにした女が立つている。

「その先は吸血鬼の住む地で、吸血鬼の城と吸血鬼の王がいるのよ。吸血鬼を退治している私でもここら辺の吸血鬼は強力でキツイのよ。アンタなんかが行つたらひとたまりも・・・つてちょっと!」

青年は女を無視し歩いていた。女は青年を追いかけた。そして再び

青年に話しかけた。

「聞いてるの？ちょっと！ そうか、分かつたわ。自己紹介もしないで失礼な奴だと思ってるでしょ？ いいわ、名前を教えてあげる。私は『<sup>スイリン</sup>水鈴』……って待ちなさいよ！」 青年は水鈴を無視し、歩き続けている。水鈴は再び追いかける。

しばらくすると青年は突然足を止めた。

「どうしたのよ？」

水鈴が訪ねるが青年は無視し、剣を抜いた。

「気を付ける。吸血鬼だ」

「え！？」

水鈴が声を発した途端に人とは異なる姿をした吸血鬼五体が一人を襲つてきた。

青年は剣で吸血鬼を一体真つ二つに斬り倒した。吸血鬼は灰となつて消えていった。青年は続けてもう一体、斬り倒した。

水鈴は襲つてきた吸血鬼を足で蹴り跳ばし腰から銃を取り出すと吸血鬼の心臓に打つた。吸血鬼は灰となつて消える。

二人は残りの二体も撃破した。その場は再び静けさを取り戻した。「いきなり襲つてくるからビックリした！」

「お前、水鈴つて言つてたな」

青年が水鈴に話しかけてきた。水鈴は青年の方を向いた。

「人の話、聞いてるじゃない。で、何・・・つと、話をする前に名前、教えてよ」

「『クロスヴエルノ』。長いから『クロノ』でいい・・・何故笑つてるんだ？」

クロノの言う通り、水鈴は笑っていた。

「だつて、やつと私の方を見て話してくれたもん。私が何話しても無視ばかりだつたし」

「・・・」

水鈴の言葉にクロノは無言だった。

「で、話つて何？」

「先程のお前の戦いを見てたがお前の動きは悪くない。下級吸血鬼相手には問題ない」

「え！？さっきの吸血鬼は下級なの！？」

水鈴は驚いている。

「人の姿をしていないうえに理性を持つていなるのは下級だ。人の姿をしていないが理性を持つてているのは中級吸血鬼、人の姿をしていて理性も持つているのが上級吸血鬼だ。人の姿をしているが理性を持つていなるのは元は人間だった奴だ」

水鈴はクロノの話を聞いて感心している。

「そりなんだ。吸血鬼に詳しいね」

「・・・話を戻すが、お前の持っている銃は吸血鬼相手には向いてない。これを使え」

クロノは水鈴に銃を渡した。

「これは？」

「銀で出来た銃だ。銀で出来るから吸血鬼相手には効果的だ。普通の弾を入れても銀丸ギンガムの働きをする」

「フーン。貰つてもいいの？」

「俺には必要ない」

クロノはそう言うと再び歩きだした。

「待つてよ！私もいくよ！」

水鈴は銃を仕舞いクロノを追いかける。

二人は北を歩きだした。

下級吸血鬼しか出ない・・・城はまだ先か・・・

## N・I・北の地（後書き）

初めまして。

初めて小説を書いてみましたがどうでしょうか。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

## No.2: 町の支配者

北の地にある町に初めて足を踏み入れたクロノと水鈴。

まだ昼だというのに町には人が一人も歩いておらずとても静かで淋しかつた。

「やっぱり吸血鬼が支配下にあるのね・・・此処『北の地』は・・・」  
水鈴は下を向き、クロノは無言だったが表情は暗かつた。  
二人は今日はこの町に泊まるため宿を探す。宿を見つけ、中に入つた。

キイ・・・カラーンカラーン

中に入ると宿の主人は驚き震えていたが顔を確認すると安心し、深呼吸をした。

「お客様か・・・てっきりラドウかと・・・」「ラドウ?」

「この町を支配している吸血鬼の名前だよ。町の娘達を一人連れていき遊んでその娘に飽きたら血を吸い殺すんだ。気に入った娘は同族にするし・・・僕の娘が連れていかれると思つてね・・・さて、泊まるのは一人でいいんだね。一人、一部屋でいいかな?」  
宿の主人は鍵を一つずつ渡した。

そして時間は進み、最も恐れる夜・・・闇の時間となつた。人々は恐怖に怯えている。宿の2階で休んでるクロノと水鈴。

「何か下が煩いわね」水鈴が煩いのに気付いた水鈴は一階を覗きに行つた。

「女、この町を助けたかつたら俺様に大人しくついてくるんだな！」

「お父さん。私、行くね。私一人のためにこの町が犠牲になることなんてダメだから」

水鈴は影で様子を見ている。

寂しそうに笑つている女が宿の主人の娘だろう。そして・・・

「あの吸血鬼がおそらくラドウ・・・」

その場にいるのは宿の主人、宿の主人の娘、そしてラドウと予測される人間とは異なる姿をした吸血鬼。

「えと、確かに人間とは異なる姿をして理性があるのが中級吸血鬼なのよね」

「リサ！」

宿の主人が娘の名を叫ぶ。

「さようなら、お父さん」

「待ちなさい！」

吸血鬼が娘を連れていこうとしたとき水鈴が姿を見せた。その場にいる全員が水鈴を見た。

「吸血鬼！その娘を放しなさい！」水鈴は吸血鬼を睨む。

「ああ！？女、この町を支配している吸血鬼ラドウ様に対しての口のききかたに気を付けな！敬語使えよ！」

「アンタに敬語？やめてよね。私が馬鹿みたいじゃない」

水鈴は鼻でラドウを笑つた。強気の水鈴に対しラドウは笑つた。

「面白い女だ。この町の女は俺様を恐がつて話にならねえ。お前が俺様についてくればこの女、放してもいいぜ」

「誰がアンタなんかに！」

水鈴は銃を取り出そうとしたが銃がない。

「（しまった！銃も弾も部屋にある！）

「どうするんだ？女」水鈴は怯えている主人や主人の娘を見た。

「・・・いいわよ。その娘を放して

「お密さん！ダメだ！」

「お父さんの言つ通りです！私が！」

主人と主人の娘が言うが水鈴は無視しラドウの元へ歩いていく。ラドウは水鈴を抱くとそのまま外へ出て行き屋根の上に昇った。

「！」

水鈴は押し倒され首筋を出された。

「何、するの？」

震える声でラドウに尋ねる。ラドウは笑みを浮かべて答える。

「俺様が気に入った女は同族にして俺様の下僕にするのさ。安心しな、大切に扱つてやるよ」

「い・・・や・・・！」

抵抗しようとするが手足を押さえられ身動きでいない。

ラドウの牙が水鈴の首筋に近づいてくる。

「クロノ！」

水鈴がクロノの名を叫んすぐのことだった。

ラドウの腕が一本血を流して切れていた。

「ガアアアアア！――！」

ラドウが痛がり叫ぶ。ラドウに隙が出来ると水鈴はラドウを足蹴りした。

ラドウは吹っ飛び地面に叩きつけられた。

「水鈴、常に銃は持つてい」

声のしたほうを見るとそこには剣を抜いたクロノが立っている。

クロノは水鈴に銃を渡すとラドウの方を睨む。水鈴もラドウを睨む。

「グ！ギ・・・サマラアアアア！――！」

ラドウが襲つてくる。クロノと水鈴はラドウの攻撃を避ける。

水鈴はラドウの頭部に弾を打つとラドウには隙が出来る。ラドウに隙が出来たところでクロノがラドウの心臓に剣を刺した。

「ギャアアアア！――！」

ラドウは灰になつて消えた。

「はあ、助かつたわクロノ。ありがとう」「別に・・・(こ)いつは中級吸血鬼の中でも雑魚の部類か・・・やはり城はまだ遠い」

日が昇るころ町中にラドウが死んだと知らされた。町はまだ暗いが町中には人の姿がちらほら見えている。  
町の住人に感謝されたクロノと水鈴。町の住人に見送られ町を離れた。

「町の人達、喜んでたね」

「だが、恐怖が消えたわけじゃない」

「そうね・・・。そういえば、クロノって何で北の地に来たの?」

水鈴の質問にクロノは反応し立ち止まる。そしてゆっくりと口を開いた。

「自分の・・・ため」

「え? よく聞こえない」

クロノの声が小さかつたため大切な部分を聞き取れなかつた。

「何でもない。さっさと行くぞ」

クロノは再び歩きだした。水鈴は疑問を浮かべながらクロノの後を追う。

クロノは言いたくなかったのだった。他人に知られたくなかったのだ。

“自分の存在を確かめるため”と・・・。

クロノと水鈴がいる場所からさらに北。  
そこに大きな城がある。

### 吸血鬼の城

城の一番広い部屋には玉座に座っている吸血鬼と部屋の至る所に立つていてる四人の吸血鬼。そこにいる全員は人間と同じ姿をしている。玉座に座っている吸血鬼が口を開いた。

「我の支配している地の同胞が消えていい」その言葉に全員が振り返る。

「どういう事ですか、ブラド様」

ブラドという玉座に座っている吸血鬼に一人の吸血鬼が前に出て尋ねる。

「何者かが同胞を消しているのだろう。アーケ、確かめに行ってくれないか？」

「御意」

アーケという吸血鬼は返事をすると姿を消した。

「（死んだ同胞がこちらがわに近づいている。・・・奴かもしけぬな）」

ブラドは怪しく笑んだ。

「ギヤアアアアー！！！」

吸血鬼の叫び声が響き、灰となつた。

「疲れたー！少し休もうよ？」

水鈴は銃を仕舞い、座り込む。クロノも剣を仕舞い声つ。

「駄目だ。いつまでもここにいると吸血鬼が襲ってくる」

クロノは歩きだした。水鈴はクロノの言葉に顔をひきつかせる。

「それはそれで困る！」

水鈴はクロノのあとを追う。

しばらく歩いていると森があつた。水鈴はクロノに尋ねる。

「町はまだ？」

「『』の森を抜けた先にあるが・・・だ」

水鈴は町が森を抜けた先にあると分かるとクロノの話を最後まで聞かずには森の中へ走つて行つた。

「はあ。仕方ない・・・」

クロノは溜め息をつき、水鈴のあとを追う。

日は落ち、夜となつた。

「夜になつたんですけど？」

水鈴はクロノを睨んで言つ。クロノは溜め息をつき答えた。

「最後まで話を聞かずに走つて行くお前が悪い。『だが、森の中へ入つたら日が暮れる』と

「それは・・・えーと、あ、今日はここで野宿だね

「』での野宿は危険だ。安全な場所を探す

クロノはそう言つと再び歩きだす。水鈴は文句を言つながら泣々と歩きだした。

しばらく歩いているとクロノは何かに気が付いた。

「水鈴、静かにしていろ！動くな！！！」

「え！？キヤ！？」

クロノは水鈴を押し倒し、水鈴の口をふさいだ。

水鈴の顔はだんだんと赤くなる。

しばらくその体勢のままだつた。

ようやくクロノは水鈴の上から退いた。

水鈴の赤はまだ赤い。

「吸血鬼がいた。中級吸血鬼もいるみたいだ。いつまでもここにいたら吸血鬼の餌食になる。早く安全な場所に・・・何故顔が赤くなつている?」

「赤くもなるわよ!（いきなり押し倒すんだもん!）」「?

水鈴の顔が赤い理由をクロノは理由出来ていなかつた。

「とにかく、ここにいつまでもいるのは危険だ。気付かれるまえに

「残念だつたな!お前達は俺様の餌食だぜ!」

突然の声に驚き、クロノと水鈴は声のした方を見る。そこには吸血鬼がいた。

二人は咄嗟に武器を取り出す。

「ほお、女もいるのか。女からは血をいただくか」

クロノが吸血鬼を斬ろうとした時、吸血鬼は口を開いた。

「動くなよ!動くと女の命はないぜ?」

「何?」

「何するのよ!離して!」

水鈴の叫び声が聞こえ、クロノは水鈴のほうを見た。水鈴はもう一體の中級吸血鬼に捕まっていた。

「煩い」

吸血鬼は水鈴の口の中に指を入れ水鈴の口をふさいだ。

「くつ!」

「男に用はねえから死んで貰うぜ!」

吸血鬼の一人がクロノを攻撃しようとした瞬間

「ギヤアアアアアア!!!!!!」

水鈴を捕まえていた吸血鬼が叫び声をあげていた。よく見てみると吸血鬼の腕が両方とも血を流して斬られていた。よく分からなかつたが水鈴は身動きが出来ると判断すると手にしていた銃で腕が斬られていた吸血鬼の心臓を打つた。

吸血鬼は灰となつて消えた。

「何が起きたの？」

その場にいる全員は驚きを隠せないでいる。

「ギャアアアアア！！！！！」

すると今度はもう一体の吸血鬼が叫び声が響いた。クロノと水鈴が吸血鬼を見ると吸血鬼の心臓から血が出ていた。

「ギ・・ギザマー！」吸血鬼の背後には人影があつた。吸血鬼が背後の人物を攻撃しようと手を挙げたが背後の人物に首を斬られ、灰となつて消えてしまった。

「何者だ」

クロノが静かに尋ねるとその人物は姿を見せるため前に歩いた。その人物は赤髪でクロノと水鈴とはあまり年齢差は代わらない青年だった。手には一本の槍がある。青年は口を開いた。

「俺は“ラル”。道に迷つてたらさつきの事になつて助けたけど···駄目だつたか？」「駄目じやないよ。ありがとう、助かつたわ。私は水鈴。そしてこつちの無愛想なのがクロノ」

水鈴はラルに自分の自己紹介をし、クロノを指差してクロノも紹介した。

「（人間···か···）」

クロノはラルを人間と判断すると剣をおさめた。

「ラルはどうしてここに？」

水鈴の質問にラルは頬をポリポリかきながら答えた。

「いや、よく分からぬいうちにここについてお前達を見つけたから」

ラルの答えにクロノと水鈴は

“ラルは方向音痴”と思わざるを得なかつた。

「ここは危険みたいだし···森を抜けるまで共に行動しないか？」

「私はいいけど···（ラルを一人にしたらまた道に迷いそつだし）

ラルの意見に水鈴は賛成だつた。しかし、水鈴はクロノの答えが気になりクロノの方をチラツと見た。クロノは水鈴の視線に気付くと

溜め息をつき口を開いた。

「確かにこの森は危険だ。ラルの実力（不意討ちばかりだが）も先程の戦いで分かったし、いいだろ？」

水鈴とラルは笑顔になる。

「さつさと安全な場所を探して休むぞ」

クロノはそう言つと先に歩いて行つた。

「クロノ、待ちなさいよ！」

水鈴とラルはあわててクロノのあとを追う。

クロノ達がいる森の上空。一つの影があつた。

「この森から中級吸血鬼の反応が一つ消えた？この森に現況があるのか？」

影は近くにあつた一番高い木に立つた。

「しかし、森の中には厄介だな。他の場所を探してみるか・・・

影は別の所へ飛び去つた。

## No.4：殺意

安全な場所で夜を過ごし、日が昇った。

3人は森の中を再び歩き始めた。

「朝はいいわね。吸血鬼の数は少ないし、日光は気持ちいいし」  
水鈴は背伸びをした。

「気は抜くな。いくら朝は出にくいとはいっても直接日光が当たらなければ吸血鬼は出てくる。気は引き締めておけ」  
氣を抜く水鈴に対しクロノは注意した。

ラルはクロノを見て思つたことを口に出す。

「クロノ、少しばかり抜いたらどうだ？」

「そうよ。気疲れするわよ」

水鈴もラルの意見に同意する。するとクロノは溜め息を吐き、口を開いた。

「お前達は氣を抜きすぎる。一人ぐらい氣を引き締めておかないと吸血鬼が来たとき対処できないからな」クロノはそう言い水鈴とラルの前を歩いた。一人もクロノの後をついて歩く。  
歩いている途中ラルが水鈴に話しかけてきた。

「何でお前達はこの森に？」

すると水鈴の顔が急に暗くなり、口を開いた。

「…・・兄を・・・探してるの」

急に水鈴の足が止まつた。水鈴の足が止まつた為クロノとラルも足を止め、水鈴を見た。

「私の兄さんは北の地で行方不明なの」

クロノは目を見開き、ラルは驚きを隠せないでいる。水鈴は話を続ける。

「8年前に吸血鬼を退治しに北の地に行つて8年間帰つて来なくて・

・それで兄さんを探しに北の地に來たの」

水鈴の顔は更に暗くなる。

「（吸血鬼に殺されたんじゃ・・・）」

ラルはこう思つたが口には出せなかつた。

「兄は吸血鬼に殺されたんじゃないのか？生きてるはずがないな」  
ラルの代わりにクロノが口にした。クロノの言葉に水鈴は無理矢理笑い答えた。

「そうかもしれない。それでも生きてるって信じてるから」笑つていてもどこか悲しそうだつた。

「水鈴・・・嫌なこと思い出させたな。『メン・・・』

ラルは水鈴に謝つたが水鈴は

「大丈夫」と明るく答えた。

「クロノは何で北の地に来たの？前に聞いたとき、教えてくれなかつたよね。今度は教えてよ」

水鈴はクロノを見て尋ねる。しかし、クロノは無視し森の中を再び歩き始めた。そんなクロノに対し水鈴は頬を膨らませラルは苦笑する。

「ねえ」

暫く無言だつた3人。突然、水鈴が話しかけてきた。

「どうした？」

反応したのはラルだけでクロノは無視した。

「森はまだ抜けれないの？」

「えーと」

「ラルの答えは期待してない。迷子だし（方向音痴だし）」

水鈴はクロノを睨む。クロノは溜め息をつき歩きながら答えた。

「土地勘があるわけじゃないから分かるわけないだろ？」  
「は？」

水鈴とラルが目を疑つた。

「じゃあ、今まではどういう風に進んでたの？」

「北に真っ直ぐだが」「はあーーー？何でよ？」

「北の城に・・・吸血鬼の城に向かってるからだ」

返ってきた応えに水鈴もラルも驚きを隠せなかつた。「何言つてゐの!? 本気?」

クロノは黙つて頷く。ラルも続けて言つ。

「吸血鬼を殺せる筈がない! 死ぬだけだ!」

「・・・別に吸血鬼を絶滅させるのが目的ではない。それに水鈴だつて兄を探し続けるならもつと危険な地に足を踏み入れなければならぬ。同じことだ」

クロノが冷たく応えるとラルは黙るが水鈴は更にクロノに言つ。「私とは違うわよ! 私は城には行かない。でもクロノは行く。クロノの方が危ないわよ! だから

「黙れ!!」 クロノは水鈴に怒鳴つた。そして水鈴を睨んで言つた。

「確かにお前と俺では何もかもが違う! お前は女だし俺とは違つて普通だ! 北の<sup>じ</sup>地にいる理由、だつて違う! 俺のことを何も知らないくせに、家族と幸せに暮らしてきたお前に俺の何が分かる!...」

「クロノ・・・

「黙れ!!」

クロノは突然、水鈴の首を絞めた。

「ク・・口・・・ノ・・・」 水鈴の意識が遠のいていく。ラルは慌ててクロノを水鈴から遠ざけた。それでもクロノは水鈴の首を絞めようとする。

「クロノ! 落ち着け!」

ドコッ

ラルはクロノを思いつきり殴るとクロノは我に返り落ち着く。

「クロノ・・・あのゴメ

「水鈴、『ゴメン』」 水鈴が先に謝りうとしたがクロノが水鈴の言葉を遮り先に謝る。

そして再び森の中を歩き始めた。

歩いている時にクロノは先程の自分を思い出した。

「（さつき、本気で水鈴を殺そうとした……。ラルが止めていかつたらきっと殺してた……。）」

クロノの表情は苦しくなる。

その後も森を抜けたまで沈黙は続く。

そして森を抜けた。クロノはラルを見て言った。

「森は抜けた。ここで別れる約束だつたな」

「・・・そうね・・・」

クロノと水鈴がラルに言つ。しかしラルは一人の傍を離れたくないはなかつた。

「いや、まだしばらくついていくよ。（今、コイツらを一人だけにするのは少し気まずいだろうし心配だな。こんな状態で吸血鬼に遭遇したら殺られるだろうな）」

「そうか・・・」

クロノは一言ラルに言つと歩く。水鈴は無言でクロノの後をついていく。ラルは溜め息をつき、二人のあとを追つ。

上空でクロノ達を見つめる一つの影。影はクロノを見つめ、そして飛び去つてゆく。

奴がいたか

こう呟いて……。

## N O . 5 : 哀しみ

「 いじは？」

クロノは何もない闇の中に一人、立っている。歩いても歩いても続くのは無限の闇。

『クロノ』

幻聴のような声がクロノの名を呼んだ。聞き覚えのある声だ。後ろに人の気配がして振り向くと水鈴が立っていた。

「 水鈴・・・あのさ・・・・・・」

クロノが水鈴に話しかけようとしたらクロノが苦しそうに頭を抑えた。

「 くつ！ ダ・・メ・・・だ！ （殺人衝動か！？）」

突然の殺人衝動にクロノは襲われた。必死に抵抗した。突然、手にしていた剣を抜き、水鈴に向けた。

「 ヤメッ！ 逃げろ！ 水鈴！」

そして足は勝手に水鈴の方へ動き剣を水鈴に振りかざした。水鈴の身体は斬られ血が周りに飛び散る。

「 うああああ！！！！！」

「 ！ ！」

クロノの目が覚めた。

「 ・・・夢か・・・。嫌な夢だ」

クロノ達は森を抜けて日が暮れたため、偶然見つけた洞窟で一晩過ごすことにしたのだつた。

「 クロノ、大丈夫？ 騷されてたけど」

水鈴がクロノに話しかけた。昨日のこともありやはり氣まずい雰囲気だった。

「ああ」

クロノは立ち上がり外に出ようとした。水鈴はクロノの服の裾を突然掴みクロノの動きを止めた。

「外、雪が降つて寒いよ」

「北はいつも寒い」

クロノは水鈴から離れて外へ出る。

外は水鈴の言う通り雪が降つていた。そのせいかいいつもより寒く感じる。

「クロノ」

クロノは名を呼ばれ後ろを振り向いた。そこにはラルが立っていた。

「何だ」

「いや、俺は別に用はないけど・・・」

「『けど』何だ？」

クロノはラルを軽く睨む。

「水鈴がな、『クロノは哀しそうだから声をかけてあげて』って言つたからな声をかけた」

「（俺が哀しい？）」

クロノは顔には出さなかつたが内心驚いている。

「別に哀しくはない。水鈴に言つとけ。俺のことは心配無用だ。自分の心配をしろ」

ラルは水鈴の元へと足を動かした。クロノはラルが行つたのを確認すると雪の降る空を見上げる。

「・・・・哀しそうか・・・・。確かにそうかもしれないな」

時間は過ぎ、クロノ達は再び歩きだす。

やはり沈黙は続く。「（哀しそう・・・・か・・・・）」

クロノは水鈴を見て水鈴の言葉を再び考えた。

吸血鬼が出ないまま辺りは暗くなつた。

また、安全な場所で一晩を過ごすことになつたため、場所を探し始めた。

「クロノ！待つて！」

突然水鈴が声をあげクロノとラルの動きを止めた。

「どうした？」

ラルが声をかけると水鈴は指をさした。さした方を見ると暗闇の中人に人の姿が微かに見えた。

「！」

クロノとラルは驚きを隠せない。三人は人の姿があるほうへ慎重に近づいた。

その人には血がついている。

「大丈夫！？」

最初に駆け寄つたのは水鈴だ。その人の身体を揺さぶつたが反応がない。

「水鈴、下がれ」

ラルが前に出てその人の脈を測つた。

「大丈夫だ、生きている。だがこのまま放置すると危険だな。安全な場所に運んで手当てをしよう」

ラルの適切な指示を受け、クロノと水鈴は行動する。

その人が目を覚ますのは次の日の夕暮れだった。

## No.5: 悲しみ（後書き）

今回は短くなりました。それに書いていながら意味が分からなくなつてきました。すみません。

いいまで読んでいただきありがとうございました。

「吸血鬼に……襲われた。人と殆んど変わらない姿をした吸血鬼に……」

昨日、助けた人間は濃い紫色の髪の女だった。女の名は“神無<sup>カンナ。</sup>”。その神無が目覚めたのは日が殆んど落ちかけた夕方だった。何があつたのか尋ねると神無は

“吸血鬼に襲われた”

こう応えた。

神無の応えに驚く三人。

「人間と殆んど変わらない姿をした吸血鬼、上級吸血鬼が……クロノが呟く。神無が話を続ける。

「逃げた方がいい。奴等は私を探している」

「何故、奴等が神無を？」

問い合わせたのはラルだった。ラルの問いかけに神無は一つの水晶を取り出した。

水晶はとても美しく輝いている。

「奴等から……北の城から盗んできた。これは“陰水晶<sup>インスイショウ</sup>”。この中には世界を闇に包み込む程の闇が入っている」

クロノ達は驚きを隠せなかつた。神無は話を続ける。

「この陰水晶を破壊すれば無限の闇が包み込み吸血鬼を倒すことが出来なくなる……永遠に……」

「ちょっと待つて！何で吸血鬼達は陰水晶を破壊しないの？」  
水鈴が疑問に思い神無に問う。クロノとラルは頷く。水鈴と同じことを疑問に思つていたようだ。

すると神無は陰水晶を地面に置き近くにあつた大きな石を上から落とそうとする。神無の行動に三人は驚き、神無を止めようとした。

しかし、神無の行動の方が早く、石は陰水晶の上におもいつきり落ちた。

「何してるのよー！」

「水鈴、見ろ」

水鈴が神無に怒鳴つてはいるがラルが陰水晶の方を指差して言った。

「嘘！？傷一つついてない」

陰水晶は傷一つ無く無事だった。神無は陰水晶を拾い口を開いた。「これで分かつただろ。吸血鬼達は“破壊しない”ではなく“破壊出来ない”。吸血鬼達は陰水晶を破壊する手段を必死で探ししている」神無は背を向けた。

「何処に行く？」

神無が歩こうとしたのをクロノが止めた。神無は足を止める。クロノは口を動かし続ける。

「陰水晶を隠そうとしているのか？」

「お前達には関係ない」

「だが、我々にはとても関係がある」

四人の声とは違う声が聞こえてきた。声の主の方を見ると男が一人立っていた。

「もう見つかったか」

神無はそう呟き二人の男を睨む。

クロノも神無と同じように男を睨み鋭く殺氣立てた。

水鈴とラルには状況を理解出来なかつた。

「クロノ、どうしたの？殺氣立て・・・」

「水鈴、ラル、この二人は吸血鬼だ」

水鈴とラルはクロノの言葉に驚きを隠せない。「神無、陰水晶を返してもらおう」

「断る」

神無はそう言うと短い刀 小太刀を取り出した。

「アーク」

アークという吸血鬼は名前を呼ばれると前に出て神無の方へ走り攻

撃する。神無は小太刀でアークの攻撃を防いだ。

「神無！」

ラルも槍を取り出し、神無に加勢する。

神無とラルがアークと戦っているなか、クロノと水鈴はもう一人の吸血鬼と対面していた。

「さて、久しぶりだなクロノ」

「ブラド・・・」

「クロノ、あの吸血鬼と知り合いなの？」水鈴が驚きクロノに問うとクロノは無言で頷き、口を動かす。

「こいつは・・・ブラドは・・・俺の復讐の相手だ・・・！」  
クロノは静かに、鋭く言う。そして鋭く殺氣立てた。その殺気に水鈴もすごく感じる。水鈴はクロノに恐怖を感じた。

“恐い”そう思わずにはいられなかつた。

するとブラドという吸血鬼が口を開いた。

「クロノ、まさかあれから一口も口にしてないのか？」

「黙れ！！」クロノの殺気が更に鋭くなる。

そんなクロノをブラドは面白がっている。

「今回の目的はお前ではないが・・・いいだろう、遊んでやる」  
ブラドはどこからか剣を出現させた。クロノも剣を手にする。

「クロノ・・・」

水鈴はクロノを心配そうに見つめる。

「大丈夫だ。手をだすな」

「でも・・・」

クロノは水鈴をキッと睨んだ。

「邪魔だと言つていいんだ！！！」

クロノは殺氣立て水鈴はそのあと何も言ひことができなかつた。クロノの殺気が更に鋭くなる。

そんなクロノをブラドは面白がつている。

「今回の目的はお前ではないが・・・いいだろう、遊んでやる」

ブラドはどこからか剣を出現させた。クロノも剣を手にする。

「クロノ・・・」

水鈴はクロノを心配そうに見つめる。

「大丈夫だ。手をだすな」

「でも・・・」

クロノは水鈴をキッと睨んだ。

「邪魔だと言つているんだ！――！」

クロノは殺氣立て水鈴はそのあと何も言つことができなかつた。

クロノとブラドの戦いが始まつた。

ブラドと戦つてゐるクロノはとても殺意に満ちた眼をしていつものクロノではなかつた

水鈴はそんなクロノに対し哀しみと恐怖を感じていた。

お願ひ・・・遠くに行かないで・・・

クロノの血が飛び散る。どう見てもクロノが負けている。それでもクロノは剣をかまえ、ブラドに襲いかかる。ブラドは軽々とクロノの剣を剣で受け止める。

「くつ！」

「どうした？ その程度か？」

ブラドがクロノの剣を弾くとクロノはバランスを崩しよろめく。ブラドはクロノにできた隙を見逃さずクロノの腹部に剣を刺す。

「ガアアアアア！――！」

「クロノ！？」

水鈴はクロノの腹部に剣が刺さったのを見て顔色を悪くした。

「（近寄りたい。助けてあげたい。なのに、何で足は動かないの！？）クロノに言われたから？」

水鈴はあまりの悔しさに涙を流した。

「私はなんて無力なの・・・」

自分にしか聞こえない声で呟いた。「ガアアアアアア――！」

突然のクロノの叫び声に驚き水鈴は顔を上げた。そしてクロノの方を見ると、クロノが先程よりも大量の血を出し倒れていた。倒れながらもクロノはブラドを睨んでいる。

「クロノ！」

水鈴は我慢できなくなりクロノのもとへ駆け寄った。そしてクロノを守るようにしてクロノの前に立ちブラドに銃を向ける。

「す・・・い・・り・・ん・・・」

クロノが弱々しく水鈴の名を呼ぶ。

「クロノに近づかないで」

水鈴は強い目をし、ブラドを睨む。

そんな水鈴を見て、ブラドは無言だった。水鈴はブラドに対しても口を動かす。「吸血鬼なんて大嫌い！私の大切にしているのを奪う！吸血鬼なんて大嫌い！！！」

「くくく・・・ハハハハハ！」

ブラドは水鈴の言葉を聞いて笑いだした。水鈴は更に強くブラドを睨む。

「吸血鬼が嫌い、か。いいことを教えてやるよ」

ブラドはクロノを見て口をつり上げる。クロノはブラドが言おうとしている内容に気付いたようだ。

「言つな！！！」

「クロノはな・・・」

「やめろ！・・・」

「実は・・・」

「やめてくれ！・・・」

「吸血鬼の血を持つてているんだ」

ブラドの言葉に水鈴は目を見開いた。あまりの驚きに何も言つようとが出来ない。

クロノはブラドを強く睨む。しかし、半面哀しそうだった。

「く、クロノが・・・吸血鬼？」信じられない。信じたくない。

水鈴は何度もその言葉を心の中繰り返した。水鈴はクロノの方を向いた。「違う・・・よね」

水鈴の言葉にクロノは無言だった。

「“違う”って言つてよー！クロノは吸血鬼なんかじゃないって！」

信じられない。信じたくない。

水鈴は何度もその言葉を心の中繰り返した。水鈴はクロノの方を向いた。「違う・・・よね」

水鈴の言葉にクロノは無言だった。

「“違う”って言つてよー！クロノは吸血鬼なんかじゃないって！」

水鈴はクロノの身体を揺らした。

“違う”と言つて欲しい。

ようやくクロノの口が開いた。

「・・・そうだ。俺の身体には吸血鬼の血が混じっている  
しかし、返ってきた言葉は今、一番欲しくない言葉だった。「プラ  
ド、こちらは終わった」

ドサッ

アークが手から放り投げたモノは神無とラルだった。  
二人の身体は血だらけだった。

「ラル、神無・・・」

二人はまだ生きている。ラルと神無は水鈴の声が聞こえたのか目を  
覚ました。

「水鈴・・・」

「ラル！大丈夫なの！？」

ラルが水鈴に話しかけた。

「クロノを・・・連れて・・・逃げろ・・・」

「でも、二人が・・・」

今度は神無が水鈴に話しかけた。

「大丈夫だ。私達が食い止める」

神無がそう言うとラルと神無は力を振り絞りそれぞれの武器を持ち、  
ブランドとアークに攻撃する。

「まだ動けたか」

アークがラルに攻撃する。ラルはアークの攻撃を避ける。

「ラル！神無！」

水鈴が手助けしようと銃を強く握り、駆け寄ろうとしたがクロノが  
水鈴を掴む。

「放して！ラルが！神無が！」

「二人の犠牲を無駄にするな」

クロノは無理矢理水鈴を連れて逃げる。

ブランドは逃げていく一人に気付き追いかけようとするが神無に邪魔

された。

「だけ

「お前の目的は陰水晶のはずだ（それでいい）」

「ここを通りたければ俺を殺してから行くんだな（少しでも遠くに逃げる）」

神無とラルは同時にブレードとアークに攻撃をする。

クロノと水鈴はラルと神無が戦っている所からそつ遠くない所に隠れていた。

「クロノ・・・大丈夫なの？」

クロノは息が荒かった。「ねえ、クロノ

「何だ？」

水鈴は真剣な眼差しでクロノを見つめる。

「吸血鬼がずっと血を吸わなかつたらどうなるの？」

クロノは水鈴の問いに下を見た。そして、ゆっくりと口を動かす。

「殺戮衝動に目覚め、やがては死に至る・・・」

返ってきた言葉は今の水鈴にとってはとても残酷だった。

「クロノが死ぬ？」

思わず口にした言葉。クロノは水鈴が口にした言葉に対して笑んだ。

「・・・そうだな・・・。俺は母の血を吸つてから血を一滴も口にしていない・・・」

「んで・・・」

水鈴が小さく呟く。クロノの耳には聞こえたのがしつかりとは聞き取れなかつた。

「何だ？」

クロノが尋ねると水鈴はクロノを睨む。

「クロノの馬鹿！！何で死ぬのに笑つていられるのー？何で・・・」

水鈴は涙を流し始めた。クロノは黙つて見ている。水鈴は突然顔を

上げ、クロノを見つめる。

「クロノ、私の血を吸つて」

「！！！」

クロノは驚き水鈴を見た。

「何を・・・！」

クロノは反論しようとしたが水鈴の目が強い眼差しをしていたために反論をしなかつた。

「血を全て吸わなければ大丈夫なんでしょう？」

「・・・だが・・・俺は長年血を吸つていない。お前の血を全て吸つてしまふかもしれない・・・」

水鈴はクロノに微笑んだ。

「大丈夫。私は覚悟が出来てる。それに、クロノを信じてる」

「・・・（不思議だ。こいつを見ていると吸血鬼の血に勝てる気がしてきた）分かった」

クロノは水鈴を引き寄せ水鈴の首筋を撫で、そして水鈴の首筋に噛みついた。

「あ・・・う・・・（変な感覚・・・頭がボーッとしてきた・・・）

「

「くっ！」

ラルと神無はブラドとアークにやられていた。

「てこずらせやがつて」

「ブラド、陰水晶だ」

アークは神無から陰水晶を奪いブラドに渡した。ブラドは受け取るとラルと神無を睨む。

「アーク、この人間を殺せ」

アークはブラドに言われると剣を手にし、剣を振り上げた。

「くっ！（身体が動かない！）」

「（クロノ、水鈴、逃げろ！）」

二人は目を瞑つた。だがいつまでたっても痛みがこない。恐る恐る目を開くとアークの剣を持っていた方の腕が無くなっていた。

二人は突然のこと驚きを隠せなかつた。

「何が・・・」「クロノ・・・」

ブラドの咳きはラル、神無、アークにもはつきりと聞こえた。

「ブラド、貴様は・・・ここで殺す！――」声のした方を見るとそこにはやはりクロノの姿があつた。

ラルと神無はクロノを睨み、クロノに言ひ。

「何故・・・戻つて来た・・・」

「俺と神無の時間稼ぎを無駄にする気か！？」

「助けたいから戻つて來たの」

二人は聞きたくない声まで聞こえてきて驚き声のした方を振り向いた。やはりそこには水鈴の姿が・・・。

「何故・・・お前まで」

「ありがとう・・・でも一人の時間稼ぎを無駄にしてゴメン。でも

二人が私達のために死ぬなんて嫌だから」「

「何故・・・？」

神無が問いかけると水鈴は微笑み一人に手を伸ばし言ひ。

「だつて“仲間”でしきう！」

水鈴の言葉を聞き、ラルはフツと笑い、水鈴に手を伸ばし、水鈴の手を取つた。

水鈴とラルは互いに笑い合うと神無を見る。神無は少し抵抗があるが水鈴に目線を合わせずに水鈴の手を取つた。水鈴は二人を立たせるとクロノの方を見る。

クロノはブラドと対等に戦つていた。

「――」の力・・・

ブラドとクロノの剣が重なり合い、剣と剣の押し合いが始まった。

「やはり！－クロノ、お前、あの娘の血を吸つたな！－！」

「やはり！－クロノ、お前、あの娘の血を吸つたな！－！」「クロノ・・・」

「ブラドの呴きはラル、神無、アークにもはつきりと聞こえた。

「ブラド、貴様は・・・ここで殺す！－！」声のした方を見るとそこにはやはりクロノの姿があつた。

ラルと神無はクロノを睨み、クロノに言ひ。

「何故・・・戻つて來た・・・」

「俺と神無の時間稼ぎを無駄にする氣か！？」

「助けたいから戻つて來たの」

二人は聞きたくない声まで聞こえてきて驚き声のした方を振り向いた。やはりそこには水鈴の姿が・・・。

「二人が私達のために死ぬなんて嫌だから」

「何故・・・？」

神無が問い合わせると水鈴は微笑み一人に手を伸ばし言ひ。

「だつて“仲間”でしう！」

水鈴の言葉を聞き、ラルはフツと笑い、水鈴に手を伸ばし、水鈴の手を取つた。

水鈴とラルは互いに笑い合つと神無を見る。神無は少し抵抗があつたが水鈴に目線を合わせずに水鈴の手を取つた。水鈴は二人を立たせるとクロノの方を見る。

クロノはブラドと対等に戦つていた。

「この力・・・」

ブラドとクロノの剣が重なり合い、剣と剣の押し合いが始まった。

ブラドはクロノを笑う。

「やはり！－クロノ、お前、あの娘の血を吸つたな！－！」「・・・」

「やはりか！旨いだろ？人の血は！」

「黙れ！！！」

クロノはブラドの剣を弾いた。ブラドは反動でよろめく。クロノはブラドにできた隙を逃さずブラドを斬ろうとする。しかし、アークがブラドの前に現れる。

「邪魔だ！」

「うつ！ガアアアア！！！」

だがアークは簡単にクロノに斬られ、灰となつて死んだ。

その様子を見ていた水鈴、ラル、神無は驚いている。

「俺と神無の二人がかりでも倒せなかつた吸血鬼をいとも簡単に・！」

クロノはブラドを斬ろうとしたがブラドは避けた。

「死ね！ブラド！！」

「そこまでよ」

突然、クロノとブラドの間に氷の柱が現れた。二人は動きを止めた。氷の柱の上に一人の女性が降りた。

「エリトリア、何だ？」

ブラドがエリトリアという名の女性に話しかけるとエリトリアはブラドの前に立つた。

「ブラドがいつまでたつても戻つて来ないから迎えに来たんじゃない。アークは死んだし」

「・・・そうだな。クロノ、北の城で待つている」

「逃げる気か！」

「何とでも言うがいい。それと」

ブラドは突然、姿を消した。

「何するの！？離して！！！」

突然、水鈴が悲鳴をあげたため、クロノは水鈴の方を見るとブラドが水鈴を捕まえていた。ラルと神無がブラドを攻撃しようとしたが簡単に避けられた。

水鈴はブラドを銃で攻撃しようとするが簡単に腕を掴まれ、首筋を叩かれ氣絶させられた。

「ブラド！水鈴を離せ！！！」

「この女は我々が預かる。この女で遊びながら北の城で待っている。何かされたくなれば早く北の城に来ることだな！」

ブラドとエリトリアは飛び去ってしまった。

雪が降り始めた。その場には先程の騒がしさはなく静けさが残った。

「水鈴・・・ゴメン・・・」

クロノは自分にしか聞こえない声で呟いたあと雪の上に倒れた。

俺はまた・・・大切な人を守るどころか犠牲にしてしまった・・・

俺のせいで水鈴はさらわれた

クロノは目を覚ました。クロノの目に映るのは暗闇。夜だというのがすぐに理解できた。そして、周りを見渡すと自分が洞窟の中にいるのも理解できた。

身体を動かしてみようとしたが身体に痛みを感じる。

「クロノ、気がついたか？」

声がした方を見る二つの影がある。その影はラルと神無だった。  
「一日間も目を覚まさないから心配した。此処らへんには人がいないし、俺と神無も怪我人でさ。お前を此処まで運ぶので限界だったんだ」

「そうか・・・水鈴はやはり・・・」

“水鈴”という名を口にするとさつきまで言葉を口にしていたラルは沈黙した。クロノも何も喋らない。

「クロノ、聞きたいことがある」

沈黙を破ったのは先程から何も喋らない神無だった。

「何だ？」

クロノが神無の方を見た瞬間、神無は小太刀を抜きクロノに刃を向けた。ラルは驚いているが、刃を向けられているクロノは驚いてはいなかつた。その時のクロノには神無の次に発する言葉を予想できたらからだつた。

「率直に言つ。クロノ、お前は吸血鬼だな」

「な、何を言つて

「私はクロノに聞いている」

ラルは神無の言葉を遮り否定したが神無はラルを睨み付け、ラルを

黙らせた。「どうなんだ?」

「確かに、俺は吸血鬼の血を持っている」

「なつ！？嘘だろ・・・」

ラルは驚きを隠せなかつた。神無は鋭く睨み付けたままだつた。

「だが、吸血鬼なら陽の下を歩けないはずだ。北の地には太陽の光は差し込まないけどクロノは南から来ただろ？血だつて欲してないし」

ラルは疑問に思つたことを一気に口に出した。その質問に応えるためクロノは口を開く。

「確かに吸血鬼の血を持っているが、完全な吸血鬼ではない。俺の母は人間。そして、父は吸血鬼の・・・王だ」

その言葉を聞き、神無もラルも驚きを隠せない。

北の城 水鈴は闇の中で目を覚ました。

「ん・・・此処は？私・・・そうだ！私、吸血鬼に拐われて！」

「ようやく、目を覚ましたか」突然、声が聞こえ声のした方を見る  
と、闇の中、月の光を浴びて現れたのはブラドだった。水鈴はブラ  
ドを睨み付ける。

「あんたは・・・」

「まだ、名を名乗つてなかつたな。私は『ブラド』」

「私を拐つて、一体何なの？」

「お前自身には用はない。だが、クロノを本気にさせるには効果的  
だと思った。だから拐つた。お前に危害は加えない」

水鈴はブラドに対し睨み付けるのを止めようとはしない。だが、ブ  
ラドは気にすることなく水鈴に近づく。

「お前の名は？」

「アンタに名乗る名はないわ。アンタ、クロノに何の用なの？」

ブラドは水鈴の近くに座る。水鈴はブラドから少し離れた。

「クロノの昔話をしよう」

“クロノ”といつ名に反応した水鈴は目の色を変えた。  
「その前に話すことがある。私は吸血鬼の王ではない」「え？」

何を話しているのか、水鈴には理解できなかつた。

「今、吸血鬼の王に一番近いのはクロノだ」

その言葉を聞いた水鈴は目を丸くした。ブラドは話を続ける。

「クロノは吸血鬼の王の血を持っている。クロノの父は吸血鬼の王。母は人間だ」

「クロノは半吸血鬼なの？」

ブラドは頷く。突然、声が聞こえ声のした方を見ると、闇の中、月の光を浴びて現れたのはブラドだった。水鈴はブラドを睨み付ける。

「あなたは・・・」

「まだ、名を名乗つてなかつたな。私は『ブラド』」

「私を拐つて、一体何なの？」

「お前自身には用はない。だが、クロノを本気にさせるには効果的だと思った。だから拐つた。お前に危害は加えない」

水鈴はブラドに対し睨み付けるのを止めようとはしない。だが、ブラドは気にすることなく水鈴に近づく。

「お前の名は？」

「アンタに名乗る名はないわ。アンタ、クロノに何の用なの？」

ブラドは水鈴の近くに座る。水鈴はブラドから少し離れた。

「クロノの昔話をしよう」

“クロノ”といつ名に反応した水鈴は目の色を変えた。

「その前に話すことがある。私は吸血鬼の王ではない」「え？」

何を話しているのか、水鈴には理解できなかつた。

「今、吸血鬼の王に一番近いのはクロノだ」

その言葉を聞いた水鈴は目を丸くした。ブラドは話を続ける。

「クロノは吸血鬼の王の血を持っている。クロノの父は吸血鬼の王。

母は人間だ

「クロノは半吸血鬼なの？」

ブラドは頷く。「・・・少し、昔話をしよう。クロノの昔話だ・・・

「

洞窟内では神無はクロノに向けていた小太刀を下ろし、これからクロノが話す話を聞こうと腰をおろした。「俺の父は吸血鬼の王。喉の渴きを潤そると父は人間の地に行つた。その時に会つたのが俺の母だ。

父は母の美しい姿、優しさ・・・全てに惚れたらしい。いつしか二人は互いに愛し合うようになり、父は母と共に毎日を過ごした。母は父が吸血鬼だと知つていたため父に血を与えて続けた。二人は人里離れた地で毎日を楽しく過ごしたが・・・吸血鬼が父を探しにきたんだ・・・月夜の美しい夜・・・」

「王、お迎えに上がりました」

ブラドが吸血鬼の王に頭を下げた。

「ブラド、私のことは放つておいてくれ

「・・・暫く見ない間に変わりましたね、王。昔の王ならばもっと恐ろしかった

「黙れ」

吸血鬼の王が言つてもブラドは口を動かし続けた。

「原因はあの女・・・ですか」

ブラドはそう言つと吸血鬼の王の後ろにいる女性、『リア』を見た。

「ならば・・・あの女を殺せばあなた様は我らの元に戻るのですね」

「アーティザンの心…」

ブラドが指を鳴らすと、吸血鬼たちが現れ、リアを襲い始めた。リアは震えて動くことが出来ない。

リアン

リアは咄嗟に目を瞑つたが痛みはいつまでたつても感じない。おそるおそる目を開くと吸血鬼の王がリアに襲つてきた吸血鬼を殺していた。「あ、あなた！！」

「大丈夫か？すまない、私

謝る吸血鬼の王に対しリアは優しく微笑んだ。

あなたを愛した日から覚悟は決めていました、あなたが謝ること

「そ、うか……」

吸血鬼の王はブランドを鋭く睨む。

「私は勝てると思っていませんのか?」

確かに昔のあなた様なら我々は勝てないでしょ。このねですか今あなた様は血も満足に口にしていない。その為に弱体化してい  
るあなた様なら勝てますよ」

アを護るため、ブラドを攻撃する。ブラドは攻撃を受け止めようとするが、弾き飛ばされてしまう。

さすがですね、王。ですがあなたはもう息が上がりでいるではないですか。我々吸血鬼にとって血は生命の源。それを満足に口にしていないあなた様はもうボロボロです。このままでは死にますよ。あの女の血を飲まないのですか？」ブラドの言つ通り、吸血鬼の王は息が上がっていた。上がっているにも関わらず、吸血鬼の王はまだ、ブラドと戦おうとしている。

黙れ。お前は私が殺す！」

しばらく戦つた末、吸血鬼の王の身体はボロボロだった。それに対し、ブラドは吸血鬼の王よりも傷が少ない。

「あなた・・・」

リアが心配そうに見つめる。そんなリアに対し、吸血鬼の王は優しく微笑んだ。

「大丈夫だ、リア。お前は私が護る」

「無理ですよ。今のあなた様では私には勝てない。諦めて、あの女を殺しなさい」

ブラドがそう言つと吸血鬼の王は再びブラドを鋭く睨む。

「黙れと言つているのが、分からぬいか！」

「あなた！私の血を飲んで！」

吸血鬼の王がブラドに攻撃しようとしたとき、リアが吸血鬼の王に言つた。吸血鬼の王とブラドは驚いている。

「（人間、自ら血を飲ませるとは・・・）」

「リア、何を？」「あなたが私の血で生きる」とが出来るのなら・・・

・

「リア・・・すまない」

「父は母から少量の血を飲み、ブラドを追い返した。だが父はその戦いで傷つき、やがて死んだ。母が俺を生んだのは父が死んでから3年後。そして、おれが12歳のときにブラドが現れた。目的は母を殺すこと。母を殺された俺は死んだ母の死体から全ての血を飲み干した」

話を聞いた後のラルと神無の表情はとても辛いものだった。沈黙が続いた。

「クロノが北の城を目指す理由は・・・」

「母と父の敵打ち」

ラルの言葉を繋げたのは神無だ。

「奴ら、許せない」

「北の城に行くぞ」

神無は立ち上がった。続けてラルも立ち上がった。

「ラル、神無。これは俺の問題。お前たちに関係ないはずだ」

「水鈴を助けなければならぬだろ？」

ラルが最初に言つた。続けて神無も口を動かす。

「お前のためではない。私は陰水晶を取り戻さなければならない。行く先は同じだからな。それに・・・」

「それに？」

神無の口が止まるとラルが聞こうとしている。

「・・・一緒にいたほうが心強い」

神無は顔を赤くして答えた。ラルはニヤニヤしている。

二人はクロノを見た。クロノはため息をつくと立ち上がった。

「行くぞ、北へ」

## 北の城

「あなたが、全ての現況ね。許せない！！」

水鈴はブラドを鋭く睨む。

「そうなるな。私は行く。ちなみにこの部屋には鍵をかけておく。窓から逃げようとしても無駄だ」

水鈴が窓を見た先には谷底だった。「逃げないわ。クロノが助けに来てくれる。絶対に」

水鈴がそう言うとブラドは水鈴を見た。

水鈴の眼は強い眼差しをしている。

「（この女、王が愛した女・・・リアと同じ眼をしている・・・）」

ブラドは頭の中でそう考えていた。

## No.9・陰水晶

北の城

水鈴は出口のない部屋の中で窓の外を見ている。  
そして小さく

「兄さん」と呟いた。

クロノ、ラル、神無は雪の降る道を北に向かつて歩いている。

「クロノ、大丈夫か？」

突然、ラルはクロノの心配をし、声をかけた。クロノはラルの方を見て首を傾げた。

「昼だけど大丈夫なのか？クロノは……その……半吸血鬼……」

「どんどんラルの声が小さくなるがクロノにはしっかりと聞こえた。

「大丈夫だ。北に近付くにつれ、陽の光も弱まつてきている。こんな自分がつくづく嫌になるな……」

クロノはラルに背を向け再び歩こうとしたが神無が動こうとしない。

「神無？」

ラルが呼び掛けても反応しない。今度はクロノが呼び掛けてみることにした。

「どうし　」

「人間の気配がする」

神無はそう呟くと走り出した。

「神無！？」

クロノとラルは神無を追いかけた。

しばらくして神無は足を止めた。神無の見詰める先を見るとボロボロのロープを着た人が木に寄り添っていた。クロノとラルがその人を警戒したが神無は無防備に近付いて行つた。

「神無！？」

「大丈夫だ。こいつは人間だ」

神無の言葉を信じ、二人は警戒を解いた。

「神無・・・か・・・」

倒れている人間は神無の名を言つた。

神無は黙つて頷く。

「神無、知り合いなのか？」

神無はラルの問いかけにも黙つて頷き、口を動かした。

「私はこの男から陰水晶をいただいた」

神無の言葉にクロノとラルが驚く。

「すまない。陰水晶は・・・」

「吸血鬼に奪われた」

「！」

言つのをためらつた神無の言葉をその人間が続けた。

「すまない。お前との約束を・・・」

神無は辛そうに謝礼するが、その人間は首を横に振る。

「いいんだ。本来は私が守るものだつた。傷付いた私が偶然通りかかつたお前に押し掛けてしまつた。それに奴等は恐れている・・・

陰水晶に・・・

人間の言葉にクロノもラルも神無も驚きを隠せないでいる。  
「陰水晶は闇が封印されているのではない。陰水晶は吸血鬼たちが恐れているこの世の闇を消すためのものだ」  
か。

人間は口を動かす。そして陰水晶の真実を語りだした。

「陰水晶は闇が封印されているのではない。陰水晶は吸血鬼たちが恐れているこの世の闇を消すためのものだ」  
つまり、陰水晶は闇の源か」

クロノがそう言うと人間は黙つて頷く。

「だが！陰水晶は壊れないぞ！」

ラルは大声で問い合わせる。

「当たり前だ。陰水晶は聖なる血を持つ者にしか破壊出来ない。この聖靈石で出来た剣……聖剣で……」

人間はそう言うと一本の剣を出した。剣は刃が短く鞘に収まっている。クロノは人間から剣を取ると、刃を見ようと鞘を抜こうとした。しかし、いつまでたっても剣は鞘に収まっている。不思議に思ったラルがクロノに声をかけた。

「クロノ、どうした？」

「剣が抜けない」

「は？」

今度はラルが鞘を抜こうとする。

「抜けない」

返ってきた言葉はクロノと同じだった。

3人は人間を見た。

人間は口を動かした。

「聖剣は聖なる血を持つ者にしか抜けない」

クロノと神無は人間の言葉を聞いて気付いた。

「だから、聖なる血を持つ者にしか破壊出来ないのか」

「どういうことだ？」

未だに分からぬラルに神無が口を開き説明する。

「陰水晶を破壊するには聖剣が必要だ。聖剣を扱える者は聖なる血を持つ者。だから、陰水晶は聖なる血を持つ者にしか破壊出来ない」「そういうことか！」

神無の説明でようやくラルは理解した。理解した直後にラルは

「でも」と言った。

「その聖なる血を持つ者って何処にいるんだ？」

その言葉にクロノと神無は頭を抱えた。しばらく沈黙が続いた。

「私の……」

沈黙を破つたのは人間だつた。3人は人間に注目した。

「私の・・・妹・・・水鈴だ」

その言葉に全員が驚きを隠せない。全員が目を見開いた。

クロノは驚きのまま口を動かした。

「水鈴の言つていた行方不明の兄はお前か」

「水鈴を・・・知つているのか」

人間はクロノを見た。

「水鈴はお前を捜しに北の地に来た。だが・・・吸血鬼にさらわれた」

「そうか・・・水鈴が来ているのか・・・」

人間は笑つた。「水鈴にこれを・・・」

人間が取り出したのは銀色に輝く首飾りだつた。

「私は・・・もうすぐ死ぬ。代わりに水鈴に・・・渡して・・・く  
れなかっか・・・？」

人間の声は少しづつ小さくなり、呼吸も荒くなつていく。「そして・  
・・水鈴に・・・心配をかけて・・・」めんな・・・つて伝えて・  
・く、れ・・・」

人間が首飾りをクロノに差し出してもクロノは受け取らなかつた。  
クロノは人間を睨んだ。

「馬鹿野郎！それくらい自分で伝えろ！」

人間はクロノをじつと見詰める。クロノは言葉を続けた。

「水鈴はお前が生きていると信じて北の地にまで來たんだ。水鈴を  
裏切るきか！」

クロノが言い終わると人間は微笑んだ。人間の目からは涙が流れて  
いた。

「私も・・・自分の手で・・・渡したい。伝えたい。でも・・・私  
は吸血鬼に・・・血を吸わされて・・・しまつた」

「！」

「今は・・・自我を持っているが・・・もう少しで自我を・・・持  
てなくなる。そうなつたら、自分の命を・・・自分で消す・・・」

人間の言葉を聞き、クロノは暫く沈黙した。そして、人間から首飾りを受け取つた。

「水鈴に・・・ごめん・・・そして、ありがとう、と、伝えてくれ。・・・

「お前の名前は?」

クロノは人間をもう一度見て訪ねた。

「火琉<sup>カリユウ</sup>・・・頼む、私を・・・殺して・・・くれ・・・」

クロノは無言で頷き口を動かす。

「火琉、伝える。安心して眠れ」

クロノは剣を抜き、剣を火琉に向けた。ラルは目を瞑り、下を向いた。神無は辛そうな顔をしている。

クロノはゆっくりと剣を頭上に上げた。

火琉は目を瞑り、下を向いて微笑んでいる。

「(水鈴、幸せに。私の大切な、妹)」

そして、剣が火琉に落とされた。

クロノ、ラル、神無の三人は墓の前に立つてゐる。墓には『火琉』と書かれている。「哀しんでいる暇はない」

クロノの言葉にラルと神無は頷いた。

彼らは再び北へ足を進める。「哀しんでいる暇はない」

クロノの言葉にラルと神無は頷いた。

彼らは再び北へ足を進める。

To be continue . . .

## N O · 9 · 陰水晶（後書き）

今回は無理矢理な展開にしてしまいました。水鈴に兄がいるというので兄の存在を出さなければと思い、出してみましたが・・・、無理矢理すぎましたね。反省します。

「ここが・・・北の城・・・」

クロノ達の目の前には城がある。

「神無は此処に来るのは二回目だよな?」

神無はラルの問いかけに黙つて頷く。

「なら、神無に案内してもらつたらいいんじゃねえの」

「私は此処が嫌いだ。目的を達成したらすぐに立ち去つた。道など全ては分からぬ」

ラルは残念な顔をする。神無は『それに』と付け足した。

「この中は複雑すぎる。水鈴の所まで無事に着けるとは限らない。しかも、この中は吸血鬼が数え切れないほどいる」

「見かけたら逃げるのが正しい選択肢だな」

クロノの言葉に神無は頷く。

「それでも行くのか?死ぬかもしれない」

神無がクロノとラルを見て問い合わせた。

最初に口を動かしたのはラルだ。

「此処まで來たし・・・引き下がる訳にはいかないな」

「ラル、お前はもともと関係ない。引き下がつてもいいんだぞ」

クロノの言葉にラルは首を横に振る。

「いや、俺は家族を守るために北の城を目指した。森で道に迷つていたとき、クロノと水鈴と出逢つたのは偶然だ」「(すごい偶然だな)」

クロノと神無は同じことを思つていた。

三人は城の中へと入つて行つた。

「おそらく水鈴と陰水晶は別々の所にあるだろ？」

神無はラルとクロノにしか聞こえない程度の声の大きさで話す。

二人は足を止め、神無の方を見る。

「別行動を提案する」

「き、危険すぎる！」

ラルは神無の意見を拒否する。

クロノは顎に手を置き、考え始めた。

「危険は承知のうえだ。だが、城の中に長居するのはもつと危険だ」

ラルは黙り込む。神無は口を動かし続ける。

「私が陰水晶を取り戻したらすぐに水鈴のもとへ行き、陰水晶を破壊する」

「分かった。俺は神無の意見に賛同する」

ラルはクロノの意見を聞き、溜め息をついた。

「分かったよ。多数決的に負けてるし……俺もその意見に従う。

ただし、俺は神無について行く」

「陰水晶の方が守りが強い筈だ。危険だぞ」

神無はラルを強く睨んで言う。ラルは一瞬引いたが、すぐにつりあげた。

「危険だからこそ神無について行くんだ」

神無は一瞬驚いたがすぐに口をつりあげた。

「クロノ、一人になるが、大丈夫か？」

ラルはクロノの方を見て言った。

クロノは首を縦に振る。

「分かった」

「陰水晶のありかは分かるが、水鈴の居場所は分からない。気をつけて」

神無の言葉に無言で頷く。

クロノたちは再び足を動かす。

しばらく歩いていると広間に着いた。

「吸血鬼！」

広間にはたくさんの吸血鬼がいた。

吸血鬼は下級・中級ばかりだった。

クロノたちはそれぞれの武器を取り出し、吸血鬼に向かつて襲いかかつた。

吸血鬼たちが切り殺された。

クロノが吸血鬼を切つているとものすごい殺氣を感じた。殺氣を感じた方向を見ると、上級吸血鬼がクロノを襲ってきた。

クロノは咄嗟に吸血鬼の攻撃を避けた。

吸血鬼は避けられたあとも続けて攻撃を仕掛ける。

クロノは攻撃を剣で防ぐ。

突然、吸血鬼の動きが止まつた。

「？」

何故、吸血鬼の動きが止まつたのかが分からなく、クロノも動きを止める。

吸血鬼が口を動かす。

「吸血鬼の王の血を受け継いでいるだけのことはありますね、クロノ様」

吸血鬼はニッコリと笑つた顔で話す。クロノは警戒を強めた。「ブラ

ラド様からの言葉を言付かつております」

ブラドという名を聞き、クロノは目を更に鋭くさせた。

吸血鬼はブラドからの言伝てを口にする。

「『お前は人間側にいるべき存在ではない。我等と共に来い』だそうです」

「人の親を殺しておいて、今度はお前達の仲間になれとは・・・随分とムシのいい話だな」

クロノは吸血鬼に攻撃を仕掛ける。

しかし、吸血鬼は簡単にクロノの攻撃を避けた。「やはり、簡単に承諾はしてくれませんか」

「ブランドと水鈴の居場所を言え」

「言えません。実力で聞き出したらどうですか？」

「そうだな・・・」

クロノの言葉を合図に二人は同時に攻撃をする。

「神無、クロノを見ろよ！上級の吸血鬼と戦つてやがる！」

吸血鬼を切っていたラルはクロノと吸血鬼の戦いに気付き、近くにいた神無に話しかける。神無はラルに言われてそれに気付いた。

「助けに行こう」「助けに行こう」

ラルの言葉に神無は頷き、クロノに加勢しに行こうとしたが、下級・中級の吸血鬼に邪魔をされ、行けなかつた。

「邪魔だ」

「クロノの所に行けないな」

神無は吸血鬼の数を数え始めた。

「十体か・・・。数は確実に減っている。コイツラを片付けない限りはクロノの所には行けない。ノルマは一人五体でいいな」

「上等！行くぜ！」

ラルの声を合図に二人は吸血鬼に襲いかかる。

クロノと吸血鬼の戦い。

ボロボロの吸血鬼に対し、クロノは殆んど無傷だった。

「（何だ？これが、吸血鬼の王の力なのか？いくら私が上級吸血鬼の中で弱くとも奴は強すぎる！――）」

クロノは吸血鬼に剣を向けて言つ。

「もう一度聞く。ブランドと水鈴はどこにいる？」クロノが吸血鬼に尋ねると吸血鬼はフツと笑い口を動かす。

「ブランド様と人間の女はこの先にある廊下を左に行けばいます。ちなみに陰水晶は右に行けばあります。しかし、その程度の実力でブ

ラド様を倒すことは不可能 ガツ！？」

突然、吸血鬼は血を出して倒れた。クロノが吸血鬼に剣を刺していった。

吸血鬼を刺したクロノの眼はとても冷たいものだった。

「うるさい。俺は「ラドを“倒し”に来たんじゃない。“殺し”に来たんだ。間違えるな、カスが！」

吸血鬼は灰となり、消えた。

「クロノ！ 大丈夫か？」

ラルと神無が全ての吸血鬼を倒して、クロノのもとに来た。

「ああ」

クロノが無事なのを確認すると安心する。

「吸血鬼から何か情報を聞き出したか？」

神無がクロノに尋ねる。クロノは頷き、さつき吸血鬼から聞き出したこと二人に話す。

「成る程な。この先か・・・」

「分かつたなら行動あるのみだ！ 行くぜ！」

ラルの掛け声にクロノと神無は頷き、広間を出た。

廊下を歩いていると左右に分かれる道がある。三人は足を止め、互いを見合つ。

「クロノ、お前は一人なんだ。気を付けるよ

「ラルもな」

「私とラルが陰水晶を取り戻したらすぐにお前の所に行く。水鈴を助け出せ」

「分かつてる。この世界から吸血鬼を消し、光の世界を取り戻そう

ラルと神無はクロノの言葉に無言で頷く。

「俺たちって、強大な闇に立ち向かう小さな光だな」

ラルが笑いながら言うとクロノと神無も思わず笑う。

「最後じゃないから、“さよなら”じゃないよ

神無がそう言いつと、クロノとラルは頷く。そして同時に息を吸う。

「またな」

三人同時に言いつと背を向け、それぞれの道に進む。

To be continue.

## 20・10・北の城（後書き）

いいよで読んでいただき、ありがとうございます。

## 北の城

クロノは一人薄暗い廊下を歩く。手に握っている剣には血が付いていて、吸血鬼を斬ったということが予想がつく。

「キシヤアアアアアアア！！！」

吸血鬼がクロノを襲つて来た。しかし、クロノは慌てることなく襲つて来た吸血鬼を斬り捨てた。クロノは足を止め、咳きだした。「ここに来てからとても身体の中にある血が興奮する。吸血鬼衝動はまだの筈だ」

クロノは止めていた足を再び動かし、廊下を突き進む。「水鈴が心配だ。ここに留まっている訳にはいかない」

だが、しばらくして再び足を止めた。そして、自分の歩いてきた道を振り返る。

「ラルと神無は無事なのか？いや、大丈夫だと信じよう」

クロノは再び足を進め、暗闇に姿を消した。

ラルと神無はクロノと別れてから吸血鬼とは一度も戦わずにいた。それでもラルと神無は慎重に先に進む。

そして、一つの扉にたどり着いた。扉を慎重に開け、中を確認する。中には誰もいない。突然、ラルは神無の名を呼んだ。

「神無、見ろ！」

ラルに言われた通りに中を見ると・・・。

「陰水晶・・・」

二人は部屋の中へと入つて行く。そして、二人は陰水晶に近付いた。「早くクロノの所に行こう」

ラルは陰水晶を持つて部屋を出ようとした時、神無がラルの腕を掴む。

「何だよ？」

「簡単すぎる」

「？」

神無の言葉をラルは理解出来ず、クエスチョンを浮かべた。

「陰水晶を渡したくないならこんなに簡単に手に入る筈がない」

「言われてみれば確かにそうだな」

神無の説明を聞き、ラルは理解した。

「何かある筈だ」

「その通りよ！」

突然の未知の声に一人は身構えた。

突然下から氷の柱が出現する。一人は別々の方向に逃げた。次々に出現する氷の柱を避け、一人は再び同じ場所に立つ。氷の柱は出現しなくなつた。

「何者だ！？」

神無が叫ぶと二人の前に女が姿を現した。

「お前はこの前の・・・」

神無言うと女は微笑んだ。

「ちょっとぴりしか見てないのに覚えててくれたの！私は吸血鬼で名前は“エリトリア”。貴方達を痛みつけたら戦いがつまらなくなるからわざとここまで楽に進ませたのよ。だから、私を楽しませてね」エリトリアはそう笑顔で言うと氷の結晶を一人に飛ばした。一人は避け、互いに武器を素早く抜くとエリトリアに同時に攻撃を仕掛けれる。

するとエリトリアは氷の剣を造りだし、一人の武器を受け止めた。

二人は驚く。

エリトリアは近付いた二人の顔をじっくりと見ると、ラルに氷の結晶を飛ばす。

ラルは避けるためにエリトリアから離れる。「大丈夫か！？」

「大丈夫だ」

神無がラルの所に行こうとしたが。

「足が・・・動かない・・・」

足元を見ると、氷が足張り付いていた。

「ねえ」

エリトリアが神無に話しかけてきた。神無はエリトリアを睨み、身構える。

「私は、可愛いモノとか綺麗なモノが好きなの。貴女、名前は？」

「神無」

「そう。神無、貴女つて可愛いくて綺麗よね。私、神無が欲しい」エリトリアの言葉にラルと神無は驚く。エリトリアは話を続ける。「でも、人間は永遠の若さがない。いづれは醜くなってしまう。だから、貴女に永遠の美しさをあげる」

エリトリアは神無の服を破り、首筋を指でなぞった。神無は短刀でエリトリアを攻撃しようとするが手までも氷づけにされ、動かせなかつた。エリトリアは牙を見せ、神無の首筋に噛みつけこうとしたとき。

「ガツ！」

エリトリアは突然口から血を吹き出す。人の手がエリトリアの身体を貫いている。

神無はエリトリアの背後にいる者を見て、目を疑つた。エリトリアの背後にいる者はラルだった。

ラルは翼を生やし、人間とは全く異なつた化け物みたいな手をしていた。

「どこかで見たことのある顔だと思ったら、ラル・ドルじゃない。50年くらい姿を見せないと思ったら・・・人間を助けてたとはね」エリトリアが言う。ラルさエリトリアの身体から手を引いた。

「ラル・ドル、何で人間の味方してるの？」

エリトリアの言葉に対し、ラルはエリトリアを鋭く睨んだ。そして口を開く。

「人間を殺すのに疑問を感じたからだ。人間を殺すくらいなら我々吸血鬼が滅ぶ。それが答えた」エリトリアはラルの答えを聞くと笑いだした。

「吸血鬼が人間を殺すのに疑問がある！？アハハハハ！当たり前のことじゃない！私たち吸血鬼は人間の血無しじゃ生きていけないのよ！」

「確かにそうだ。だが、人間の血を吸い付くし、殺す必要はないはずだ！」

「それだけじゃ足りないのよ」

神無は色々あり、頭の中が混乱している。二人の会話についていけないのでだ。

二人は神無を気にすることなく会話を続ける。

「ブランドが吸血鬼王の前に姿を現してから吸血鬼の中に人間を殺す者が現れた。吸血鬼王もそれからおかしくなった。人間を殺すようになった」

「ラル・ドルそれで姿を隠したの？ぐだらないわね。ところでアンタ、何年くらい血を吸つてないの？」

「2年くらいだな」

「死ぬわよ、アンタ。神無の血、吸つたら？」

エリトリアの言葉を理解した神無は身構える。

「そろそろ殺戮衝動が目覚めるんじゃない？人間の姿だつて保てないじゃないの」

「黙れ！！！」

ラルはエリトリアに爪で攻撃する。エリトリアは避けると氷の結晶をラルに飛ばした。ラルは氷の結晶を弾く。

ラルは手をエリトリアに向けるとエリトリアの足元に闇が出現する。エリトリアは驚き、闇から逃げようとしたが闇から逃げることが出来なく、ラルの攻撃を直撃した。

ラルはこの隙に神無に近づき、神無に張り付いている氷を碎いた。

そして、神無に触れようとしたとき。

パン

神無はラルの手をはじいた。

そして、ラルを鋭く睨む。

「今まで騙してたんだな！」

神無の言葉にラルは沈黙し、神無は続ける。

「私だけではない！クロノも水鈴も皆を騙してたんだな！」

ラルは何かに気付くと神無を押し、神無の前に出た。

神無は驚きラルを見ると目を疑つた。

ラル身体には氷の剣が突き刺さり、氷の剣が刺さっているところから血が出ている。

ラルは氷の剣を身体から引き抜き、氷の剣を碎いた。そして、神無を見て口を開く。

「神無・・・大丈夫だな・・・。お前は陰水晶を持ってクロノの所に行け」

神無に陰水晶を渡した。その代わりに神無から短刀を取るとエリトリアを睨み、神無に話しかける。

「衰弱している俺にエリトリアを倒すことは出来ない。だが、足止めは出来る。早く行け！」

「だが、お前は死ぬぞ」

「俺は長い間血を吸つてないからもう長くはない」神無はラルのその言葉を聞き、耳を疑つた。

ラルは一瞬だけ神無に微笑むとエリトリアの所に突っ込む。ラルとエリトリアとの戦いはどう見てもラルが負けている。神無は目が放せなかつた。

「何、心配している？」

小さく咳き、自分に言い聞かせる。

「奴は吸血鬼なんだぞ。私を騙してたんだ。心配する必要はない筈だ」

神無は立ち上がり、この場を去ろうとした時。

「ラル・ドル、これで終わりよ！」

エリトリアの声が響いた。

ラルは傷付き、倒れていてエリトリアはラルにとどめをさそと氷の剣を振り上げていた。

「ラル・ドル、逆らわなければ生きていたのに。さよなら」「エリトリアの手はラルの所に落下していく。ラルは目を瞑った。しかし、いつまで経つても剣が刺さる感触がない。そつと目を開くとラルの代わりに神無が剣に刺されていた。

ラルは驚いた。自分を嫌っている神無が助けたことに。

「神無！？」

エリトリアの攻撃は神無に直撃し、神無はラルの方に倒れる。ラルは倒れてくる神無を受け止めた。

「どうして！？」

「どんな姿でも・・・ラルに・・・代わりないことに・・・気付いた・・・」

ラルはエリトリアに手をかざし、光を出した。

「キヤッ！」

エリトリアは目が眩み、何も見えない。その隙にラルは神無を抱き、その場から逃げ出す。

「逃がさないわよ！ラル・ドル！」

エリトリアが見えるようになつた時にはその場に誰もいなかつたがエリトリアはこの部屋にあるたつた一つの扉をくぐつた。

エリトリアから逃げ出すことに成功したラルと神無だがどちらもボロボロだつた。

「エリトリアを倒さない限り、クロノの所に行くのは無理か」「ラル・・・」

「神無、大丈夫か！？」

「血は・・・私の傷口・・・から出ている血で・・・足りるか？」

ラルは神無の言葉に驚いた。神無は話を続ける。

「奴を・・・倒せるのは・・・お前しかいない。私の・・・血がお前を強く出来るなら・・・私の傷口から出ている・・・血を飲め」ラルは神無の言葉にしばらく考えた。しばらくし、神無の言葉に頷く。

そして、神無の傷口から出ている血を飲み始めた。

血はこんな味だったのか

To be continued .

## 20・11・血の味（後書き）

投稿が遅れてしまい申し訳ありません。

11月まで読んでいただきありがとうございました。

## N o . 1 2 . 開の姿（前書き）

申し訳ございません。

手違いで前のを消してしまいました。これは新しく作成したもので  
す。

内容を少し変えてあります。

## N O · 1 2 · 間の姿

ずっと信じて待っていた。私の大切な仲間。私の大切な・・・

「ラル・ドル、諦めて  
出てきたらどう?」

エリトリアは暗く広い廊下を歩いている。  
手には氷の剣があった。

カツン・・・

「そこね!」

小さな足音だった。

それでもエリトリアは聞き逃さなかつた。

エリトリアは氷の欠片を音のしたほうに飛ばした。

「さよなら　！－！？」

一瞬のことだつた。

エリトリアの頬に何かが攻撃してかすり傷ができ、血が流れていた。  
エリトリアは剣を強く握り、身構えた。

「ラル・ドルね！出て来なさい！－！」

エリトリアがそう言つた次の瞬間。

キイイイイイイイイ

剣と剣がぶつかる音が強く鳴り響いた。  
エリトリアの前にはラルがいる。  
ラルの手には神無の刀があつた。

「ラル！…あなた、あの女の血を飲んだのね…！」

「そうだ」

「やつぱりね！でも元気なのは今だけ。長くはもたないわよ

「もつ必要はない」

「何ですって！？」

ラルはエリトリアを力強く押し、氷の剣を碎いた。そしてそのまま  
エリトリアの身体を貫く。

「カハツ」

エリトリアは身体から大量に血を出し倒れる。ラルも力が抜け、片  
膝をついた。

「ラル」

声がしたほうを見ると神無が足元をふらつかせ、立っていた。

「早く行こう。クロノと水鈴が待つていてる」

「やうだな

二人は互いに身体を支え暗闇の中に消えた。

「こまま済まないわよ」

クロノは走っていた。

襲いかかる敵を簡単に切り捨てる。

そして、田の前にある扉を激しく開けた。

バーン

扉の中の部屋はとても広かつた。

その部屋の中心には。

「水鈴！」

水鈴とブラドが立っていた。

「クロノ！？」

水鈴はクロノの所に行こうとしたがブラドによつて阻まれた。

クロノはブラドを睨む。

ブラドはクロノを見て口元を吊り上げた。

「クロノ、待ちくたびれたぞ。ほう、一人で来るとは・・・私と一対一で戦つつもりだな」

「ブランド、水鈴を返して貰いつ」

「この女は勝者にのみ与えられる。返して貰いたかったら私に勝つことだ」

ブランドは剣を握り、クロノに刃先を向ける。

クロノも剣の柄に手をかけたとき、水鈴が心配そうに自分を見ているのに気付いた。

クロノは優しく水鈴に微笑む。

「大丈夫だ。必ず勝つて、お前を助ける。だから見守っていてくれ

「うん。私、信じてる」

水鈴も思わず微笑んだ。

クロノも剣を抜いた。

クロノが剣を抜くと同時に突然、ブランドが剣で攻撃してきた。

クロノは直ぐに反応し、ブランドの剣を剣で受け止める。

カキイイイイイン

「直ぐに反応するとはな。これなりだ？」

ブランドは素早くクロノに攻撃する。

だが、クロノはブランドどんな攻撃も剣で受け止める。再び剣と剣をながく交える。

「なかなかやるな」

「讃めの言葉として受け取つておぐ

「だが人間としてはだ……」

ブランドは剣を持たないほつの手でクロノの腹部を貫いた。

クロノは血を吐き出した。

クロノの腹部からは血が流れる。

ブランドがクロノの腹部から手を抜くとクロノは膝をついた。

「くつー。」

「もつと本氣を出せ。でなければお前の母親を殺した意味がない」「な・・・に・・・・?」

クロノはブランドの言葉に反応した。

水鈴もブランドの言葉に耳を傾ける。

「『お前を完全な吸血鬼にするためにお前の母親を殺した』と言つたんだ」

クロノはブランドの言葉を聞き、『ブランド』に激しく憎悪を向けた。水鈴もブランドを睨みつける。

クロノはブランドに攻撃する。

ブランドは攻撃を受け止めるが力が強く少し押されぎみだった。ブランドはクロノの剣を弾き、後ろにさがる。

「クロノ!――?」

水鈴は目を疑つた。

クロノの手は人間とは異なる手になり背からは翼が生える。

その姿は吸血鬼だった。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す」  
ロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコ  
ロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコ  
ロス！……！」

クロノは剣を捨て、一瞬でブラドの近くに行きブラドの腹部を手で  
貫いた。

ブラドの腹部からは大量の血が流れ、ブラドは口から血を吐き出しつた。

「カハツ」

ブラドから手を抜くとブラドを蹴り飛ばす。

「ガツ！」

ブラドは倒れた。

そして倒れたままクロノを見た。

「ここまでは・・・創造以上だ」

また、水鈴はブラドの姿を見て恐怖を感じていた。

「あれがクロノ？面影が全く感じられないわ」

「カハツ！」

再びクロノはブラドを蹴り飛ばし、ブラドは声を出す。

「クロノ！…やめて！…！」

水鈴が声を張り上げクロノを止めるがクロノには水鈴の声が全く届いていない。

「無駄だ。」うなつたクロノは止められない

「え？」

水鈴はブラドの言葉に耳を傾ける。

ブラドはクロノに攻撃されつつも水鈴に話し始めた。

「クロノの母親を殺したときもクロノは同じようになつた。我々全員で止めたがクロノ一人によって殆んどが殺された」

「そんな・・・」

「今のクロノはあのときよりも遙かに強い。止めることは出来ない」

「クロノ！…！」

私は祈ることしか出来ないの？クロノ・・・お願い！やめて！…！

To  
be  
con-  
tinued.  
.

## No.12・闇の姿（後書き）

更新が遅れてしませんm(—\_—)m

ここまで読んでいただきありがとうございました。

「やめて！クロノ、もひつやめて！……！」

ブラドを痛め続ける吸血鬼となり、我を失つてしるクロノを水鈴は何度も叫んだ。

しかし、水鈴の叫びも空しく、クロノの耳には届かない。

「無駄だ・・・」じつは以上、止められはしない

ブラドがそう言った。

ブラドは必死にクロノの攻撃を避けているが避けきれてはいけない。

「私は・・・無力すぎるわ。クロノの力になりたいのに

水鈴は涙をボロボロとこぼす。

「クロノもラルも神無も、みんな傷付いているのに私だけ」

水鈴はキッとクロノを睨めた。

「私だけ足手まといはいや！……！」

水鈴はクロノの所へ走り出した。  
しかし、クロノに簡単に弾き飛ばされる。

「クロノ！」

弾き飛ばされともまた、クロノの所へ走り出す。  
しかし、また弾かれる。

何度も何度も水鈴はクロノの所へ向かつ。

クロノが向かつて来る水鈴を弾こうとしたとき。

「クロノー！」

水鈴がクロノの名を叫んだ。

クロノの動きが一瞬止まった。

水鈴は出来た隙を逃さずクロノの目の前に立ち、クロノを抱き締めた。

「もう、苦しまなくていいよ」

クロノは水鈴の言葉に反応した。

水鈴は言葉を続ける。

「クロノのやんな姿、クロノのお母さんは望んでないよ  
「母・・・さん・・・？」

「クロノのお母さん、きっと悲しんでいるよ。クロノのお母さんは  
クロノが元氣でいればそれでいいと呟つてる」

クロノは水鈴を見つめた。

水鈴から目を離せなかつた。

「復讐とかどうでもいいと思つてゐるよ。だから、いつものクロノに戻つて……！」

「無駄だ。吸血鬼王の血は止められない」

水鈴の言葉をブラドは否定する。

クロノは手をゆっくりと動かし始めた。

そして、水鈴の方へ向けた。

水鈴はクロノの手を握った。

「クロノの手はまだ温かい。人を殺さないからだよ。人を守ろうとしたからだよ」

水鈴がそう言つた次の瞬間、クロノは水鈴を強く抱き締めた。  
その行動に水鈴とブラドは目を丸くした。

「クロノ！？」

「ありがとう、水鈴。俺の手はまだ温かいんだ。人を守れてたんだ」

「うん。クロノは体が吸血鬼でも心は人だよ」

「水鈴、ありが ガッ！？」

突然、クロノは口から血を吐き出した。  
倒れてくるクロノを水鈴は受け止めた。  
クロノの背後にはブラドが立っていた。  
ブラドがクロノをやつたのだ。

「クロノをもう少しで吸血魔王に仕立てあげられたが、この女に邪魔された」

「仕立てあげる・・・？」

「どういふことだ？」

クロノはふらつきながらも立ち上がった。

クロノの問いに、ブラドは口元を吊り上げて答える。

「我々吸血鬼は吸血鬼王がいるだけで力をより強力にする。だから吸血鬼王が必要だ」

「だから父を必要以上に追っていたのか」

「そうだ。でなければ裏切り者を求める必要はない」

クロノは

「それでも」と口にした。

「吸血鬼というのは強力だな。人間なんかより優れている」

「下等生物と一緒にするな」

ブラドが冷たい目をクロノに向ける。

クロノは突然、ブラドに襲いかかる。

ブラドはすぐにクロノの攻撃に気付き、クロノの攻撃を受け止める。

「自我を失っていたときの記憶は残っている。自我を失っていたときよりも劣っているな」

「確かに。動きはスマートになつたが。クロノ、貴様を吸血鬼王にする方法をずっと考えていた」

ブラドは水鈴を見た。

「あの女を殺せばいいのだ！！」

ブラドは水鈴に襲いかかる。

水鈴は驚く。

ブラドの動きは素早く、水鈴は対処出来なかつた。ブラドが水鈴に斬りつけた。

水鈴の目の前には血が飛び散つていた。しかし、それは水鈴の血ではなかつた。クロノの血だつた。

「水鈴、無事だな」

「クロノ！」

倒れてくるクロノを水鈴は支える。

「水鈴、これを・・・」

クロノは水鈴に一本の剣を差し出した。

聖剣だつた。

「お前に伝えたいことがある。俺はお前の兄に会つた」

「え？」

突然のこととで水鈴は耳を疑つた。

「お前の兄・・・火琉に会つた」

「火琉兄さんに会つたの！？兄さんは何処にいたの！？」

「お前の兄は吸血鬼に血を吸われ、もう人間に戻ることは出来ない。お前の兄は死を望み、死んだ」

「兄さんが・・・死んだ・・・?」

水鈴にその言葉は辛かつた。  
あまりの辛い言葉に涙を流した。

「火琉はお前に『ごめん、ありがとう』と言っていた」

クロノは水鈴に銀色に輝く首飾りを渡した。  
水鈴にはそれが何なのかすぐに理解できた。

「これは、兄さんが私の誕生日にプレゼントしようとしてた首飾り・  
・。兄さん!」

水鈴は首飾りを強く握った。

「水鈴、剣を抜け」

水鈴は頷き、剣を抜いた。  
剣はとても美しく輝いている。

ブラドは剣を見た瞬間目を見開いた。

「まさか、あれは聖剣!?といふことは、あの女は聖なる血を持つ  
もの!?」

バーンツ

突然、強く扉が開かれた。

開けたのは人間の姿に戻ったラルと神無だった。  
二人は互いの身体を支えていた。

「二人とも、無事だつたのね！」

「水鈴、その剣で陰水晶を壊せ！」

「え？でも、陰水晶は闇が入っているんじゃ？」

神無の言葉に理解出来ない水鈴。

今度はラルが叫んだ。

「違う！陰水晶を破壊すれば吸血鬼が滅びる…だから

！？」

ラルと神無の身体が何者かによつて貫かれた。

二人の背後にはエリトリアがいた。

エリトリアが一人を攻撃したのだ。

「アハハハハ！…シネシネシネシネシネ…！」

神無はエリトリアを斬りつけた。

エリトリアは灰となり死んだ。

「私達、もう…ダメだ」

「でも、最後の力を振り絞る」

二人は最後の力を振り絞り、陰水晶を水鈴に投げた。  
投げたあの二人は地面に倒れる。

「ラル！神無！」

「水鈴！聖剣で陰水晶を破壊しろ！一人の犠牲を無駄にするな！」

「させるかあーーー！」

ブラドが水鈴を襲う。

しかし、それはクロノにより、邪魔される。

水鈴は剣で陰水晶を破壊した。

「そんな！ーー！」

今まで暗かつた空に太陽が出現した。

太陽の光を浴びたブラドは灰となり消えていく。

ラルも少しずつ灰となり消えていく。

「ラル？」

ラルは消える前に意識を取り戻した。

「俺は吸血鬼だ。黙つててゴメン」

「いいの。今までありがとうございました」

神無も意識を取り戻した。

神無はラルを見て微笑んだ。

「ラル・・・消えるのか・・・」

「ああ。神無、好きだ」

「私もだ」

互いに微笑み、ラルは消えていった。

神無も目を閉じ、そのまま目を開くことはなかつた。

そして、クロノも足から灰になりはじめた。水鈴は倒れたクロノに近づいた。

「クロノ・・・消えないで！私の大切な人にこれ以上消えて欲しくない！！」

「水鈴・・・聞いて欲しいことがある」

「え？」

腕の力で水鈴に顔を近づかせ、水鈴に口づけをした。

水鈴は目を見開いた。

そして、水鈴から口を放す。

「好きだ」

「クロノ・・・」

「水鈴は俺にとつて光だった。初めて会ったときから好きだったのかもしれない」

水鈴の目には大量の涙があつた。

「クロノ・・・」

「答え、聞かせて」

水鈴はクロノを抱き締めた。

「私もクロノが好き！……だから、消えないで！……誰か！クロノを助けて！……」

水鈴がそう叫んだ瞬間、水鈴の首飾りが光った。  
光はクロノを包み込んだ。

クロノの消えていた足は元に戻り、クロノの姿は人間の姿になる。

「クロノ……」

「水鈴……」

二人は互いに抱き合い、口づけをした。

【1年後】

クロノと水鈴は北の城がある地に来ていた。

北の城はあの後、二人が燃やし、焼け跡から遺体が一人出てきたそ  
うだ。

それは神無の遺体だろう。

北の城跡には墓が二人分ある。

その墓には“ラル”と“神無”と書かれていた。

「何で、俺だけ助かり、しかも人間になれたんだ？」

「思い出したの。あの首飾りは願えば一度だけ奇跡を起こすって」

「そうか・・・」

クロノの手を水鈴はギュッと握った。

「二人の分まで生きよつ、ね！」

「ああ」

二人はその場から立ち去った。

この一連のことは水鈴とクロノしか知らない。

end

N O · 1 3 · 奇跡 · · · (後書き)

“月夜”やつと終了です。

あまり良くない終わりかたかもしません。申し訳ありません。

いつの間にか一人は両思いになつてましたね。

ラルと神無もいつの間にか両思いになつてました。

では、月夜を今まで読んでいただきありがとうございました。  
他の作品も読んでくださいね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0972d/>

---

月夜

2010年10月9日20時46分発行